

## シリーズ—栄養を考える その3 栄養管理とスピリチュアルケア—命のスープ

がん研有明病院胃外科

部長 比企 直樹

### ●がん患者にとって“食を残す”ことの重要性●

私はがん研有明病院で胃がんの手術の担当をしています、胃がんの手術以外に、栄養部という部も担当しています。

「がん患者と栄養」というキーワードは最近になってようやく浮き彫りにされてきましたが、以前はがん患者に必要なものは手術や抗がん剤であり、栄養は二の次という通念がまかり通っていました。

本日は、がん患者において食べることがどれだけ価値を持ち、我々医療従事者はどのようにその患者をケアしていくべきなのか、そして食べられない患者にそのような栄養療法が可能なのかを述べていきたいと思います。

人は食べることに生きがいを感じ、喜びを得て、湧き出る力を得ます。もちろん、おいしいものを食べたいと思い、何を食べようかと思いをめぐらせることで唾液が分泌されるかもしれません。こういった食に対する思いはがん患者さんでも全く同じです。ただ、痛みや苦しみ、そして悲しみから食事を摂取できなくなったり、抗がん剤によって味覚を失ったり、そして胃を取られたことによって、食べられなくなってしまったりということから、食から遠ざかることも少なくありません。このように食べることを諦めた患者さん、そして諦めざるを得なかった患者さんがたくさんいます。

腸管が使用でき、咀嚼・嚥下機能が障害されていなければ、理論的には食事ができます。たとえば、頭頸部がんの放射線化学療法は激しい喉頭咽頭炎を引き起こし、食欲低下を導きます。治療前から胃瘻を作製し経腸栄養を行っておくと、この喉頭咽頭炎、口内炎の発生を予防し、治療後の食事摂取開始が早まるといわれています。また担がん状態における味覚障害において、微量元素が果たす役割は大きく、微量元素補給により味覚を取り戻す患者もたくさんいます。このように食べることを諦めた患者さんに、少しでも食べられるようになる取り組みは重要です。

がん研有明病院ではベリー食という給食を用意しており、これはゼリー、バナナ、カレ

一など食種に捉われず、とにかく食欲を湧かせて簡単に食べられるようなメニューを用意しています。通常は給食を拒否しても、このベリー食ならば食べてみようかという患者さんも多く、とにかく“食を残す”という目的の給食方法を用意しており、これは極めて有用です。

### ● “命のスープ” との出会い ●

がん研有明病院には“命のスープ”と呼ばれるスープがあります。このスープは、私の友人といいますか、人生の先輩であるフランス料理界の巨匠、井上旭氏によるレシピから作られています。

井上氏は1945年鳥取県に生まれ、21歳で渡仏、フランスの三つ星レストラン、トロワグロ、パリのマキシムで修業し、1976年に若干31歳で銀座のレカンというお店の料理長として腕を振りました。1984年に京橋にオーナーシェフとしてシェ・イノを開店しました。1993年には東京サミットで晩餐会料理を担当したという、日本一の料理人であります。

ある日、井上氏から電話があり、井上氏の母上が胆管がんの終末期であり、余命3カ月と宣告され、絶食点滴管理で命を全うするのみという状態であることが告げられました。井上氏は「先生、人が食べられないなんておかしいですよ、一口もですよ。飴を舐めることもできやしない。どうにかありませんか？ 本当に食べたらどうにかなっちゃうのでしょうか？」と心の底から振り絞るような声で尋ねられました。「何を食べさせてあげたいですか？」という私の質問に対して、「私の作った黄金に輝くコンソメスープを一口、一口でいいから口に運んでやりたいんです」と井上氏は答えました。私は何の躊躇もなく「ぜひ、お母様にそのコンソメスープを差し上げたらいかがですか」と、たとえ一口で余命が短くなっても、そのスープはきっとお母様にとって命のスープとなるに違いないことをアドバイスしました。数カ月後、井上氏から電話があり「先生、私は心より感謝します。昨日母が亡くなったのですが、亡くなるまで私が心をこめて作った命のスープを何度も何度も飲んでくれて、『おいしい、おいしい』と涙を流しながら喜んでくれたんですよ」という内容でした。

その後、2005年にごがん研有明病院で、井上氏は「人の一生における食事の大切な意味について」というタイトルで講演を行って下さいました。シャイな井上氏は、シャトー・ラトゥールというワインをペットボトルに入れて持参し、気付け薬つきの講演はがん研100年の歴史始まって以来でしたが、その内容はとても素晴らしいものでした。

「命のスープをぜひ、がん研のがん患者さんに振る舞っては？」という井上氏のアイデアは、当時の院長、武藤徹一郎先生の快諾と栄養部のスタッフの熱意により実現することとなりました。井上氏はがん研の厨房にシェフを派遣したり、スタッフをシェ・イノに招きスープ作りの特訓をするといった、気合いの入った、そして気の遠くなるような作業をボランティアで引き受けて下さったのです。苦節1年、がん研では命のスープが完成し、食べられなかった人、食べることを諦めていた患者さんの舌を楽しませています。

## ●栄養はがん治療と予後に大きな影響を与える●

次に、がん患者さんに栄養がなぜ必要か、もしくは栄養がどのように良いかというお話をしたいと思います。がんと闘うために栄養は不可欠であります。ところが一方、がんを育ててしまうのではないか、栄養をたくさんやることによってがんが育ってしまうのではないかという懸念もあります。実際、がん細胞、腫瘍は糖を取り込んでどんどん大きくなっていくことは知られています。一方、アミノ酸や脂肪といった栄養素においてはがんを育てる力はそれほどないといわれています。したがって、がんを育ててしまう栄養をやるべきか、がんを闘うための自分の力を着けるための栄養をやるべきか、このような問題がたくさん挙がっています。

がんの治療とは、主に三大治療といわれる、手術療法、放射線療法、化学療法などがあります。栄養がないと、もしくは栄養が不足すると、これらの治療がうまくいかないといわれています。手術療法では合併症が増えてしまい、放射線療法では先ほど述べたように喉頭咽頭炎もしくは口内炎みたいなものが起きてしまうといわれています。化学療法では、様々な有害事象が起きて、その継続が危ぶまれ、継続ができない一番の大きな因子として体重減少、栄養不良が挙げられていることも事実です。

さらには、栄養はそのがんの予後にも関わってくるといわれています。胃がんの患者さんで太り気味と痩せた人、どちらの予後が良いかというふうに調べましたところ、太り気味の方ががんになったほうが、痩せた人ががんになったよりも明らかに予後が良いというデータが出ました。また、アルブミンという栄養の指標が高いほど、予後が良いということもわかってきました。したがって、栄養は良いほうがおそらく予後を良くするのではないかとされています。

また、がんの終末期においては、栄養をたくさん取ることがむしろその苦しみを強めてしまうというふうにいわれ、その輸液量は制限されることがガイドラインによって示されています。ところが、栄養をあげるというよりは、むしろ食べること、食べる楽しみを得るという意味では、食事はとても重要となります。がん研有明病院で調べたデータによりますと、亡くなる3日前まで食事を取っている人が70%もいて、亡くなる寸前まで食事を取っている人も少なくありません。

栄養のがん治療における重要性、食べることの価値についての研究は年々盛んになっています。新しい薬の開発や、ロボットを使った手術療法が進歩することと同等、いや、それ以上に効果のある栄養の成分がわかってきました。たとえば傷を治す栄養素、腸の細菌を整える栄養素など、がん治療の最前線で用いられるとても重要な栄養素がわかってきました。

がん治療の進歩は、この人の食べるという重要な行為、そして重要な栄養素の投与というキーワードの上に成り立っていることを我々は忘れてはいけません。